

性・ジェンダー (1)

一人称とジェンダー

—アイデンティティ、パフォーマンスと権力の考察—

上智大学 デール・ソイヤ

1 目的

この報告の目的は、日本語の一人称とジェンダーの関係性からアイデンティティ、パフォーマンスと権力のダイナミクスを考察することである。この目的を果たすため、日本において X ジェンダーというジェンダー・アイデンティティを持っている当事者に対して行った聞き取り調査に基づいて考察する。X ジェンダーは、簡単に言うと女でも男でもないと感じているアイデンティティであるが、個人によって様々な解釈も可能である。日本語の一人称はジェンダー化されており、人の「性別」によってどの一人称にするかが決定されている。X ジェンダーの場合、その一人称をどう選択するのかを考察したい。

2 方法

報告のために使うデータは、X ジェンダーとしてアイデンティファイしている 25 人への聞き取り調査である。この調査は博士論文のために行われ、X ジェンダーというアイデンティティを検討するものである。その中に一人称と自分のアイデンティティの関係性についての質問もあり、このデータをもとに一人称の問題を検討する。分析にあたって、クレア・マリィ (2007) が指摘する発話者のネゴシエーションのプロセスを参照し、インフォーマントの一人称に関するネゴシエーション・プロセスを調べ、社会的な言説を参考する。一人称のジェンダー化や権力 (Foucault 1978)、および一人称と日常的なパフォーマンス (Goffman 1959) の関係性も調べ、個人の選択肢にどう影響するか検討する。

3 結果

同じ「X ジェンダー」というアイデンティティを持っていても、各一人称 (例 私、僕、俺等) の把握やニュアンス、および一人称の選択に関する理由が個人によって異なっていることがわかった。個人の一人称の使用の裏に様々な社会的なプロセスが働いており、それに加えて個人の経験や個人の解釈もある。自分のアイデンティティを表すために一人称を選ぶ他、社会の男女二分法に違和感を持っているため一人称の使用を避ける場合もあった。そこには社会的な言説の権力の働きも見られ、一人称 (特にジェンダー的に特定されている一人称) への抵抗や嫌悪があった。

4 結論

一人称の選択と使用は戦略的であった。一人称の選択は社会的な権力とジェンダー言説とで結ばれており、その中で個人ができる範囲で自分に最適なものを選択していた。一人称を選ぶことは、単に「性別」によって決定されているものではなく、その一人称を巡る言説や個人のアイデンティティと社会的によるジェンダーに望まれているジェンダー・パフォーマンスをもとに個人で決めることである。

文献

クレア・マリィ, 2007, 『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション(切りぬける・交渉・談判・掛け合い)行為の研究』 ひつじ書房。

Foucault, Michel. *The Will to Knowledge*. London: Penguin Books, 1978.

Goffman, Erving. *The Presentation of Self in Everyday Life*. Garden City, N.Y.: Doubleday, 1959.